

夢はみているだけでは意味がない。 覚和歌子さん



YAMANASHI People
甲斐のひと、インタビュー
 覚和歌子(かくわかこ)
 山梨市生まれ。大学卒業と同時に作詞家デビュー。SMAP、小泉今日子、沢田研二、クミコ等に作品を提供。92年淡路島「世界環境芸術会議」で、地元小学生と共演した実験詩朗読ライブをきっかけに身体表現としての詩に目覚める。以後、建築、音楽、舞、絵画、写真などのコラボレーションを試みながら、「朗読するための物語詩」という独自の分野を開拓。国内外各地でステージ活動を精力的に展開している。映画「千と千尋の神隠し」主題歌「いつも何度でも」の作詞で2001年レコード大賞金賞受賞。昨年11月にはCD「青空1号」をリリースした。

「いつも何度でも」の作詞で脚光を浴びている覚和歌子さん。映画「千と千尋の神隠し」の主題歌で、2001年レコード大賞の金賞を受賞した歌である。この歌が私たちの耳に届くまでには、不思議な縁ともいえるようなエピソードがあった。

きっかけは覚さんと親交のある歌手・作曲家の木村弓さんが、宮崎駿監督にあって一通のファンレターであった。老若男女に大人気の監督に届くファンレターの数は、月に何万通という単位である。その膨大な中から、木村さんの手紙が目にとまり監督本人から返事をもらうのである。それを機に交流がはじまり、木村さんと覚さんは「いつも何度でも」を当時進行していた新企画の主題歌として作り、宮崎監督に送ったのである。

ところがその企画自体がなくなり、その歌もお蔵入りになってしまった。それから二年半。かつて監督に送ったその歌を「千と千尋の神隠し」の主題歌に使用したい、という話が突然持ち上がり、いまに至ったのである。

fureai

覚さんは「いつも何度でも」は「純粹に作る喜びだけで書いた作品。ヒットさせようというような色気なしで出来上がったものなんです」と言う。覚さんのことばと歌への愛情がにじみでたこの歌が数々の映画興行の記録を塗り替

えた映画と結びついたには、運命にも似た縁を感じた。覚さんのことばへの興味は幼少期にさかのぼる。

12歳までを山梨市で過ごした覚さんは、ことばに関心のあった両親の影響で、幼いころから日本語に親しんでいた。「さんずい、のつく漢字をいくつ探せるかな。時間は一分。よーい、どん。」こんな遊びを家庭の中で楽しみながら育ったという。

初めて作詞・作曲をしたのは小学一年生で、小学三年生のときにはすでに「作詞家になる」と決めていたという。有言実行、初志貫徹、想いは変わることもなく、大学卒業と同時に作詞家デビューしたのである。

多感な幼少期を過ごした山梨を振り返り、覚さんは、こう語ってくれた。

「山梨で過ごした12年は、私には十分な時間だったと思う。あの時期に豊かな自然を吸収して、表現するエネルギーを貯めていたんじゃないかな。山梨はいつも意識の奥のところにあって、私という人間の基本を形づくっているのを感じます。」

覚さんの名刺には「詩作朗読」という肩書きが書いてある。近年、作詞に留まらずライブや朗読の舞台も行っている「人のやらないことが好き」という覚さんの表現は、「書く・読む・歌う」の融合

体であり、独自のジャンルを全国各地で展開している。

「執筆は机に向かうだけの孤独な作業。これに対し朗読会や音楽会などのライブは一期一会、血の通った言葉を、その場にいるお客さんと共有するという喜びがあります。ことばを介して現場のエネルギーを共有できるんですね。」

舞台で覚さん自身がことばを表現することで、彼女の詞の世界はさらに広がってゆく。ライブや講演会を全国各地で行う。その精力的な活動の原動力について、こう語ってくれた。

「自然の流れに逆らわない。無理はない。偶然にも意味をつけることで、それはひとつの意義になる。やるべきことをやっているだけなんです。」

夢を着実に現実にしてきた覚和歌子さん。順風満帆にきたわけではない。

「いまは大変な時代だと思うんです。だからこそ、自分は社会や若い人たちに夢を追いかけるよう働きかけてゆきたいと思ってます。夢は具体的であればあるほど、そのために何をしなければいけないかが、自然と引き出されてきます。『〜になりたい』ではなく、『〜になるためには』を考えれば具体的な行動が見えてくるんじゃないかな。」

夢はみているだけでは意味がない、と言っ、かなえることにこそ意味があると。

インタビュー後、「ありがとうございまして」と笑顔を交わし、雑踏に消えてゆくその後ろ姿は、颯爽としていた。



谷川俊太郎さんと共演した詩のライブにて。朗読会や音楽会などのライブ活動も実施している。詳しくは公式ファンサイトまで <http://www.5a.biglobe.ne.jp/~misohito>